



◆◆◆◆子どもの良い点に目を向ける◆◆◆◆

あなたは物事を肯定的に考える人ですか。それとも、どちらかと言うと否定的に考える傾向が強いですか。

大抵の物事には、良い面も悪い面もあります。そのどちらに目を向けるかによって状況はずいぶん違った方向に展開するものです。例えば子育てをする時に、子どもの悪い面ばかりに目をとめて否定的な言葉ばかり投げかけていると、子どもはやる気も自信も持てない人間になってしまいます。だから、「だめね！何度言ったら分かるの！」と言う代わりに、なるべくお子さんの良い面を探して、「あ！上手にできたね」とか「よく頑張ったね！」と褒めてあげてください。子どもというのは、本質的に親から褒めてもらいたい、認められたいと願っていますから、その気持ちをうまく利用して努力を促してやるのが大切です。

ところで、淀川長治さんという映画評論家を覚えていますか。若い方はご存じないかと思いますが、番組の終わりに「サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ」とサヨナラを3回くり返すお決まりの挨拶でとても有名だった方です。その淀川さんは、仕事柄、毎日たくさんの映画を観て批評しなければならなかったのですが、「私は、どんな映画でも、必ず良いところがあるから、それを見つけて、皆さんにお伝えすることが自分の使命だと思っているんです」と語っておられました。

子育てをする親たちも、こんな信念を持ってほしいと私は願います。親がいつも自分の良い点に目を向けてくれていると感じたら、子どもたちはどれほど幸せでしょうか。



◆◆◆◆規則だけでは◆◆◆◆

今の時代は、子どもたちが道を踏み外す危険や誘惑で満ちあふれています。こんな時代に、子どもたちを健全に育てるにはどうしたら良いのでしょうか。

ある親たちは、子どもたちが間違った道に進んでいかにないように心配するあまり、守りきれないほどたくさんの規則を定め、それを守らせようとします。でも、青少年の心理に詳しいジョシュ・マクドゥエル博士は、次のように指摘しています。「思春期の若者に対して、親であれ、教師であれ、信頼関係なしにただ規則だけを押し付けてはいけません。それでは反抗心を生み出すだけです。」

博士によれば、これほど混乱した世の中にあっては、規則以上のものが絶対に必要で、それは良いものを選びとろうとする動機付けだということです。そして、その動機とは、親や学校の先生が時間をかけて親しく関わりながら信頼関係を築いていく時に生まれて来ると教えています。



この言葉を裏付ける一つの例をお話ししましょう。私の友人で、とても繁盛している蕎麦屋の経営者がいます。彼は高校生の頃、友達が暴走族に入っていたことから、自分も誘いにのって面白半分に暴走族に加わった時期があったそうです。爆音をたてながら、人目を引く通りを走り回ったり、時には対立する他の暴走族と喧嘩するために出陣したりすることもあったそうです。でもそんな時、彼はいつも強い罪悪感を感じて、喧嘩の現場に向かう途中でこっそり群れから離れ、ひとり路地裏に潜んだそうです。また、地方から家出して出てきた女の子がいて、僕が家まで送るから帰った方がいいよと言って説得したりもしたそうです。そんな彼ですから、やがて、良心の呵責に耐え切れなくなって、ある日こう思ったそうです。「いつまでもこんなことをしていたらダメだ。今日で暴走族は卒業しよう」と。さて、そう思った理由を尋ねると、彼はこう答えました。「だって自分を一生懸命育ててくれる両親のことを考えたら、いいかげん悪いことはやめなきゃって思ったからだよ」と。この言葉は大切な真理を伝えています。つまり、良い親子関係を築いて親の愛情を伝えることは、規則以上のものを行うということなのです。